

御子を信じる者は

ヨハネの福音書 3章 31-36節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様はどんな方か、また何を語ったのか、さらにイエス様は私たちに何を与えてくださるのか、ということが書かれています。

1. イエスはどんな方か？

まず31節を見てみましょう。「**上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。**」

イエス様は、「上から来られる方」「天から来られる方」と言われています。イエス様は、私たちのように、地から出て、地に属し、地のことを話す方ではありません。イエス様は、天から来られ、天に属し、天のことを話される方です。イエス様は、永遠の昔から真の神であられる方で、肉体をとって人となられたのです。

多くの宗教の教祖また神となる存在は、人が神となるという方向性を持ちます。難行苦行をしたり、悟りを開いたり、あるいは人に供養されて、人が神となっていきます。しかしキリスト教は、多くの宗教と全く逆の方向性を持ちます。キリスト教は、人が神となるのではなく、神が人となられるのです。キリスト教においては、人はいつまでも人のままです。人は決して神にはなりません。キリスト教は、永遠の昔からおられた唯一の真の神が、肉体をとって人となられ、人に仕えられ、人を救うために自らの命を犠牲にされたというものです。

イエス様は、天から来られた唯一の真の神であられるゆえに、すべてのものの上におられます。35節を見ると、「**父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった**」とあります。イエス様は、「神の子」です。それゆえ「御子」と呼ばれます。キリスト教の神は、「三位一体の神」です。父・子・聖霊という三つの位格を持つただひとりの神です。父も神であり、御子も神であり、聖霊も神であるけれども、神は三人いるのではなく、ただひとりしかおられない、これを「三位一体」と表現しているのです。父なる神様とイエス様は、愛において結ばれています。そして父なる神様は、愛する御子であるイエス様をこの世に遣わし、御自身が持っているすべてのものをイエス様にお与えになりました。イエス様は、父なる神様からすべてのものを与えられ、すべてのものを持っておられますが、その中でも特筆すべきことは、イエス様は永遠のいのちを持っておられ、御自身を信じる者に、その永遠のいのちを与えてくださるということです。

34節を見ると、イエス様は父なる神様から、「**御霊を限りなく**」与えられているとありま

す。この「限りなく」という言葉は、「量ることなく」という意味の言葉です。計量カップなどで、「あなたにはこれだけ」と量を制限されて、聖霊を与えられたのではなく、イエス様は父なる神様から、無制限に聖霊を与えられたということです。

私たちクリスチャンも、イエス様を信じる時、聖霊を与えられ、一人ひとりに聖霊の賜物が与えられると聖書は教えています。しかし私たちの場合は、「量りに従って」聖霊の賜物が与えられるのです。エペソ 4：7 で、使徒パウロはこう言っています。「**私たちはひとり一人、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました**」。私たちクリスチャンは、無制限に聖霊の賜物を与えられません。私たちには、「あなたは五タラント」「あなたは二タラント」「あなたは一タラント」と一人ひとり「量りに従って」聖霊の賜物が与えられるのです。しかしイエス様の場合は、そのように量りに従って与えられるのではなく、無制限に、限りなく、父なる神様から聖霊を与えられているのです。

私たちは、地から出て、地に属し、地のことを話すことしかできない存在です。しかしイエス様は、天から来られ、父なる神様からすべてのものを与えられ、すべてのものの上におられる方です。そして、私たちに聖霊を与え、永遠のいのちを与えてくださる方なのです。イエス様は肉体をとって人となりました。それゆえ、見た目においては、私たち人間と何ら変わりはありません。しかし、その存在においても、持っているものにおいても、私たち人間とは「天」と「地」ほどの違いがあるのです。

2. イエスは何を語ったか？

では、そのイエス様は何を語られる方なのでしょう。32 節を見ると、「**この方は見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない**」とあります。イエス様は、見たこと、聞いたことを証しされるのです。イエス様は、天から来られ、父なる神様から遣わされて来られました。イエス様が見たこと、聞いたことというのは、天で見たこと、父なる神様から聞いたことです。私たち人間は、地から出て地に属し、地のことを話すことしかできません。もしイエス様が天から来られなければ、私たち人間は、地のことしか知らなかったかもしれません。天のこと、神様のことを、知ることができなかったかもしれません。イエス様が天から来られることによって、私たちは、天のこと、神様のことを知ることができるようになったのです。

34 節には、「**神が遣わした方は、神のことばを語られる**」とあります。イエス様は、「神のことば」を語られるのです。イエス様は、父なる神様のもとで、見たこと、聞いたことを語られました。それゆえイエス様のことばは、神そのものの言葉と言えます。しかし、32 節を見ると、「だれもその証しを受け入れない」とあります。私たち教会は、現代において、神様のことばを語ります。人々に向かって、いつでも教会にいらしてくださいと呼びかけて、神様のことばを語ります。しかし多くの方は、神様のことばを受け入れません。天地を造られた唯一の真の神様がおられること、イエス様が真の神であられること、私たちが神様の御前に罪人であること、世の終わりに最後の審判があること、イエス様を信じ

れば誰でも救われることを語ります。しかし、多くの人々は、その神様のことばを受け入れません。そもそも耳を傾けません。神様に関心を持ちません。宗教は、科学の未発達時代には意味を持ったが、科学が発達した今となっては馬鹿げた神話に過ぎないと考えているのでしょうか。それとも教会に問題があるのでしょうか。牧師の語り方に問題があるのでしょうか。

しかし二千年前も、人々は神様のことばを受け入れなかったのです。真の神であるイエス様が語っても、人々は神様のことばを受け入れなかったのです。私たちクリスチャンは、イエス様が説教をすれば、すべての人が神様のことばを信じ受け入れると思うかもしれませんが、しかしイエス様が説教をしても、それを受け入れない人々は多くいたのです。それどころか、人々は最終的に、イエス様を十字架に付けて殺してしまっただけです。私たち人間の中にある、神様のことばを受け入れないという神様に敵対する心は、二千年前も今も大して変わりはないのです。

3. イエスは私たちに何を与えるか？

では、神様のことばを受け入れる受け入れない、イエス様を受け入れる受け入れないで、私たち人間の何が変わるのでしょうか。36節を見てみましょう。「**御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる**」。イエス様のことばは、神様のことばです。この天地を造られ、歴史を支配しておられる神様のことばです。それを、受け入れるか受け入れないか、信じるか信じないか、聞き従うか聞き従わないかが、私たち人間に求められているのです。私たちは、どちらかを選ばなくてはなりません。もしイエス様を信じ受け入れ、聞き従っていくなれば、その人は「永遠のいのち」を与えられます。しかしもし、イエス様を信ぜず受け入れず、聞き従わないのなら、その人の上に神様の怒りがとどまることとなります。

ここで大切なのは、「神の怒りがその上にとどまる」という時の「とどまる」という言葉は、ギリシヤ語の原文では未来形で書かれているのではなく、現在形で書かれているということです。つまり、神様の怒りは、将来、私たちの上に留まるのではなく、今まさに神様の怒りは私たちの上に留まっているということです。「ウェストミンスター小教理問答」には、私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食べて以来、どんな状態にあるのかを次のように言っています。「**全人類は、墮落によって神との交わりを失い、今は神の怒りと呪いの下にあり、そのため、この世でのあらゆる悲惨と、死そのものと、永遠の地獄の刑罰を免れないものとされています**」(問 19)。私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食べた時から、神様との交わりを失いました。そして、神様の怒りと呪いの下にあるのです。そのため、私たちは、この世であらゆる苦しみや悲しみを経験し、やがて肉体の死を経験しなければならなくなりました。そして死後には、永遠の地獄の刑罰を受けなければならないのです。聖書によれば、これが、私たち全人類の、免れることのできない現実だと言うのです。

神様の怒りは、将来、私たち人間の上を下るというのではないのです。私たち人間は、今まさに神様の怒りと呪いの下にあるのです。だからこそ、私たちはこの世でのあらゆる悲惨を経験しているのです。そして、このままいけば、私たちは永遠の地獄の刑罰を受けなければならないのです。イエス様は、その神様の怒りと呪いから私たちを救うために、天から来られた方なのです。

私たちは、何もしなければ、このまま神様の怒りと呪いの下で、罪と悲惨のもとに苦しみ、恐怖の中で肉体の死を経験し、死後には永遠の地獄の刑罰を経験しなければなりません。それはまさに、「永遠の死」とも呼ぶべきものです。しかし私たちは、36節にあるように、もしイエス様を信じれば、「永遠のいのち」を持つことができるのです。「永遠のいのち」とは、神様の怒りと呪いから救われることです。

なぜイエス様を信じる時に、神様の怒りと呪いから救われるのでしょうか。それは、イエス様が私たちに対する神様の怒りと呪いを、イエス様が十字架の死において、身代わりに受けてくださったからです。イエス様の十字架の死は、私たちの罪に対する神様の裁きです。神様は、私たちを裁く代わりに、イエス様を裁かれたのです。私たちを怒り、呪う代わりに、イエス様を怒り、呪われたのです。このイエス様を神の子、救い主と信じ受け入れ、聞き従って歩むなら、神様からすべてのものを与えられているイエス様が、私たちに聖霊を与え、「永遠のいのち」を与えてくださるのです。

イエス様を信じるとは、どういうことでしょうか。イエス様を信じるとは、イエス様を受け入れるということです。33節には、「**その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである**」とあります。イエス様を信じ受け入れるとは、印鑑を押すようなものなのです。「神が真実である」ということを認める印鑑を押すようなものです。私たちの社会では、印鑑は重要な意味を持ちます。宅急便の荷物の受け取りのような小さなことから、家などを購入する大きな事にも、印鑑は使われます。印鑑は、私たちの意志を表します。その物事が確かであること、その物事に同意することを、印鑑を押すことで表します。イエス様を信じるとは、神様との契約に、イエス様との契約に、印鑑を押すようなものです。そして、その契約の報酬として、私たちは「永遠のいのち」を与えられるのです。36節の「永遠のいのちを持っている」という言葉も、ギリシヤ語の原文では未来形ではなく、現在形で書かれています。「永遠のいのち」は、将来与えられるものではなく、今、現在与えられているもの、イエス様を信じた時から与えられるものです。

36節では、「信じること」と「聞き従わないこと」が対比されています。その意味で、信じるとは、聞き従うことを含むことなのです。イエス様を信じているけれど、聞き従わないというのは、あり得ないことなのです。イエス様を信じるとは、イエス様に聞き従うことなのです。一度イエス様を信じて、神様との契約、イエス様との契約に印鑑を押したなら、その後の人生は、イエス様に聞き従って生きるのです。神様のことば、イエス様のことばは、聖書に書かれています。イエス様を信じたなら、自分中心に生きるのではなく、聖書に従って、イエス様中心に生きるのです。それこそ「永遠のいのち」なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、アダムとエバが神様の命令に背いた時から、神様の怒りと呪いの下にあります。しかしあなたは、御子イエス様を天から遣わし、私たちに対する怒りと呪いを、イエス様の十字架にぶつけました。あなたの怒りと悲しみが同時に交差する所が、二千年前の十字架です。あなたがイエス様を通して差し伸ばしてくださった救いの御手を、私たちが信じ受け入れることができますように。今日、これからイエス様に聞き従い、「永遠のいのち」に生きることができますように。どうか聖霊を豊かにお与えください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。